

塩尻の文学

第10号 (木曾平沢・木曾漆器)

瓜生卓造・森泰三・柳田國男・大田南畝

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。

発行 2009年12月8日



Akahiko

Kishiko

Masumi

Bokusui

Shiki

Utsubo

『櫂の冬』 瓜生卓造

木曾路を旅し、木曾平沢の漆器店で飯台を買います。その店主との話などが興味深く書かれています。

木曾の土産

去年の三月初旬のことである。塩尻から名古屋行の鈍行に乗った。なんとなく早春の木曾路が見たかったのである。藪原にでもいこうと思ったが、木曾平沢でふらりと下車してしまった。木曾漆器で聞こえた町である。

駅前の坂を下って街道に出ると、両側にはずらりと漆器店がならんでいた。私はとっつきの一軒をひやかした。大きな店でいくつもの飾棚にところ狭しと漆器がならんでいる。シーズン・オフで店内に客の姿はなかった。棚をのぞきこんでいると、お茶をどうぞ、と声がかかり、ストーブの傍に座った。

主人が出てきて名刺をくれた。手塚滝三郎商店とあって、私ははじめて店名を知った。主は問わず語りに木曾漆器について話しはじめた。山の国、木の国で、木地物は古いが、漆器は宣伝ほど昔からではないらしい、ただ戦後地元から革新系の代議士が出て、この人が、中国から漆を持ち込んだため、ほかの産地よりも復興が早かった、というような話を聞かせてくれた。まだまだ研究しなければならない、ともつけ加えた。名産地へいけば、どこも元祖、日本一といったがるのに、ここの主は変わっている一。私は主の話に興味深く聞き、主の人柄を好ましく思った。〔中略〕

私は主人に茶菓の厚遇を謝し、飯台を一つ求めて店を出た。竹のタガから底にいたるまで、どこもかしこも漆黒で、ふちだけに細い朱線が塗られている。私がこれを求めたのは、こういう素朴なものが木曾漆器にふさわしい、と思ったからで、もう一つは値段が手ごろだったからである。〔中略〕

瓜生卓造

小説家。神戸市生まれ。（1920-1982）

登山、探検をテーマとする作品を多く発表。

『杜鵑（ほととぎす）』 森泰三

漆器職人の伸次は、ある時から妻以外の女性と会っていました。それを聞かされた妻の綾は、寂しさから…。せつない物語です。

木曾の深い谷間に沈んだ漆の村であった。

漆器を古くからの特産とする村の風習として、村人は、日常の調度はもとより、障子、襖の棧、柱、天井などの一切に漆を塗っていた。材の腐蝕を防ぐ実用もあろうが、生業を誇る村人の気位が、艶やかな漆の色にとけこんでいた。辺鄙な山国にあって、そこだけが異郷のように、華麗な光沢につつまれたその村のたたずまいは、どこか古風な物語の趣を漂わせていた。

三郎が、夏冬の休暇、村へ帰るときはいつも厄介になる蒔絵師の兄伸次（のぶじ）の家は、村はずれに近く、裏山の麓にあって、二階からは、街道の両側に立ち並ぶ家々の石を置いたトタン屋根が人目におさまった。街道は昔の中仙道である。街道と平行に、此方には中央線、向うには奈良井川の溪流が走っていた。廻りは鬱蒼とした木曾の山である。

〔中略〕

夏以来の伸次は、十指をこえる一夜を牧子と過している。その一夜の宿を、いつも下諏訪に定めるわけにもゆかなかった。或る時は塩尻で待合せ、田川浦の温泉へも行った。二時間の汽車を甲府まで揺られたこともある。富士見へも行った。富士見から奥の武智温泉の鄙遠（ひえん）をよろこんだこともある。行先は、会社の同僚から聞かされたりして、その界限に明るい牧子の指定が多かった。それらの、何かを逃れているような旅は、いつも伸次の複雑な心情と一緒に運んでいたのである。〔中略〕

森泰三

小説家。京都府生まれ。（1922-2005）

京都大学文学部卒。西洋古代哲学研究者でもある。

『北国紀行（抄）』柳田國男

民間伝承の掘り起こしのために信州へ再三訪れていきます。明治42年の記録です。木曾平沢のまちの風景など。

平沢は名のごとく少しの田あり。檜の木の厚さ四、五分の板切れ、膳の立木地とて多く積み重ねたり。櫛と塗物がこの山間の今の生業で、人夫として鉄道工事に出る者も二、三人しかないという。この辺の山に木がなくなったのは維新後のことで、道中の時代には山も青々としていたという話。〔中略〕

柳田國男

民俗学者。兵庫県生まれ。（1875-1962）

『壬戌紀行』大田南畝

大阪の任を終えて、江戸へ帰るまでの紀行文です。諏訪神社の御柱のことが書かれています。

平沢村といふにいたるには、畑よりすこし上りたる道也。右に諏訪大明神の宮居あり。御柱とて柱四本たてたり。土人、「諏訪明神の母君也」といふ。此村のほとり、山椒魚といふものをひさぐ。箱根山にてみし魚也。又奇石をひさぐものあり。〔中略〕

大田南畝

江戸中期の文人・狂歌師。東京都生まれ。（1749-1823）

～ 読者の方から、おすすめ本です ～

「真田三勇士忍術名人 猿飛佐助」雪花山人

(名著復刻 日本児童文学館⑥立川文明堂版 ほるぷ出版) 貸出不可・閲覧のみ
猿飛佐助は鳥居峠の麓に住み、武術の稽古をしました。

「西街道談奇 一」松本清張 (松本清張全集 52)

奈良井宿の宿場祭りで行われる、御茶壺道中でのお話です。

「ふるさと童話 しおじりむかしばなし」(社) 塩尻青年会議所

塩尻市の昔話が紹介されています。漢字にふりがながふってあります。

▲▼▲ 図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも ▲▼▲

参考資料 (塩尻市立図書館でお借りしました。)

- ・「長野県文学全集 第二巻 明治編<Ⅱ>」郷土出版社
- ・「新日本古典文学大系 84」岩波書店

(塩尻市立図書館の相互貸借サービスでお借りしました。)

- ・「樺の冬」瓜生卓造 木耳社 *上田市立図書館より

(塩尻市立図書館のレファレンスサービスで閲覧できる図書館を教えてくださいました。)

- ・「杜鵑」森泰三《「新潮」昭和 40 年 8 月号》 *信州大学付属図書館松本合同図書館

漆器の魅力・華やかさとは？漆の色、器の形、蒔絵の美しさや高度な技術などでしょうか。

「漆器の里に学ぶ 高校生の見た榎川村」という本を読みました。東京の駒場学園高等学校の生徒達が漆器づくりを体験し、その感想文が掲載されていました。他にも、テレビの無い部屋での宿泊、食事の心配、地域の人々とのふれあいなどが書かれてあって、ほほえましく思えました。